

クリニックレター 2016.4月

〒663-8113 西宮市甲子園口2-8-31 医療法人岐黄会西本クリニック

TEL:0798-65-5111 FAX:0798-65-5115 HP: <http://www.nishimotoclinic.jp/>

このクリニックレターは、西本クリニックから患者様への情報を、すばやく、わかりやすくお伝えするためのお手紙です。原則月1回の発行で、スタッフが皆さんに知っていただきたい事をビビッドに発信していきます。

傷寒論と温病学

「漢方」とはその名のとおりに「漢の国（中国）から伝わった医学」という意味であり、そのルーツは、中国の伝統医学です。中国伝統医学における最も古い書物としては、「黄帝内経素問（紀元前3世紀頃）」「神農本草経（1世紀頃）」「傷寒雑病論（3世紀頃）」があり、「黄帝内経」は中国伝統医学の基礎理論を、「本草経」は当時の薬物学を、「傷寒論」は治療学を集大成した書物として知られています。

なかでも、「傷寒雑病論」は西暦200年代に中国の南陽（現在の河南省の一部）に生まれた張仲景によって著されたといわれるもので、感冒様の症状を呈する初期から、病情が悪化したり誤った治療によって死に至るまでの、さまざまな過程での治療法が系統的に示されています。張仲景はその「序文」の中で、このように述べています。

「私の一族はいままで人数が多く、昔は二百余人を数えた。ところが建安元年（紀元196年）以来、10年足らずの間に3分の2が死んでしまった。そのうち、傷寒病で死んだものが10分の7を占めた。（中略）疾病で突然に、或いは若くして死んでいった彼らを救ってやれなかったことに心が痛む。このようなわけで、私は書物を書き残す決心をした。（後略）」

張仲景の一族の半数以上が死に至った「傷寒病」とは、おそらく、高病原性鳥インフルエンザやSARSのような、パンデミックウイルスによる感染症であったかと思われます。

「傷寒病」の初期症状は、「寒」と「風」の特徴を持っており、具体的には、「悪寒」「節々が痛む」「汗が出ない」などの症状が現れます。これらの症状に対しては、「桂枝湯」「麻黄湯」「葛根湯」などのお薬を使います。これらは皆さん方も一度は聞かれたことがあると思いますが、現代でも風邪やインフルエンザに用いられる有名な処方ですね。2000年近くも昔の知恵が今でも臨床に生かされているのです。（裏面に続く）

一方、同じ風邪でも、寒気がほとんどなく、咽喉痛や頭痛、咳といった症状から始まるものも多いですね。症状が重い場合は高熱が何日も続いたり、発汗が過剰で脱水になったり、出血傾向が表れたり、意識が混濁したりすることもあります。今の病名で言うと、日本脳炎やコレラ、あるいは、ペストやエボラ出血熱のようなものもその類かも知れません。これらの病気に関しては、「傷寒論」の中ではあまり詳しく書かれてはいませんが、中国の明代1408年～1643年の235年間に19回、清代初期1644年～1860年までの214年間に、80回を超えるパンデミックがあったということが知られています。

このような病気を分析し、治療法をつくり上げたのが、葉天士（1667-1746）や呉鞠通（1758-1836）といった医師たちで、これらの病気は、傷寒の「寒」に対して、「温」の性質を持つことから「温病」と名づけられ、その研究は「温病学」と呼ばれています。

温病の性質を持つ風邪の初期症状に用いる薬には「銀翹散」は「桑杏湯」などがあります。温病学が発展した清の時代は、日本が鎖国政策をとっていたり明治以降は西洋文明の模倣に一生懸命で、これらの処方が日本で広まるチャンスがなかったことから、我々が日常診療で医療保険を使って処方するお薬にはリストアップされていないのですが、「銀翹解毒散」や「天津感冒片」などの商品名で薬局で販売されているものもありますので、「寒気がなく」「節々も痛まず」「咽喉の痛み」や「頭痛」があるような風邪の予備薬として、薬局でお求めになっておくのもよいかもしれません。

今年6月におこなわれる第67回日本東洋医学会学術総会では、「傷寒論再再考」というシンポジウムが企画され、西本が座長と講演をおこない、奇数土曜日外来担当の田川先生がシンポジストとして参加してくれます。このため、6月4日はクリニックをお休みさせていただきますのでご了承ください。

私の自宅近くの二テコ池の桜です。

二テコ池は、過日亡くなられた野坂昭如氏の「火垂るの墓」の舞台にもなった場所で、近くには阪神淡路大震災の記念公園や、広田神社などがあります。近くには大きな雑木林があり、今の季節は、ヒバリやウグイスの声などが心を安らげてくれるのですが、この雑木林も近々マンションに変わってしまうとか・・・四季を感じさせてくれる場所がまたまた少なくなっています。



クリニックレターのバックナンバーをお読みにになりたい方は、クリニックのホームページをご覧ください。